インタビュー２

地域生涯学習プロジェクト

情報社会科学部　中川　晴夫　教授

プロフィール

社会教育、生涯学習、特に青少年の学校外教育活動・地域文化活動、人権教育、生涯学習社会に果たす公民館・図書館・博物館などの社会教育施設の在り方などについての実証的・理論的研究を専門分野とする。主な研究業績として「総合的な学習の現状調査報告書」「生涯学習と青年期教育」「子どもはどこで育つか」。

どのような取り組みをされるのですか

生涯学習にとって、公民館というのは非常に重要な施設です。その公民館の活性化のために、学生が直接参画していこうというのが、今回の地域生涯学習プロジェクトの大きな主旨です。具体的には、生涯学習に関する地域調査や研究、そして、実際に生涯学習講座を学生が参画して行政の方々と共に企画し、運営していきます。

知多半島には、子供を育てていく子育ての知恵や生活の知恵がたくさんあります。また、祭りとか伝統とかがまだまだ残っており、漁村の若衆宿（※１末尾に語句説明）などは貴重なものと言えます。

そのような貴重な伝統や文化といったものを記録化し、多くの人にその大事さを伝えていく役割もこのプロジェクトは担っています。地域の文化、地域学をどう子供たちに残していくのか、近年、そういうものが姿を消しつつありますが、教育学の観点からこのプロジェクトでは整理していきます。

今年度は、半田市を中心に調査および実践をしてきました。そして、来年度は、常滑市でも調査および実践を本格的に始めます。両市を行うことで、今後、半田市と常滑市の比較研究も行っていきます。

学生たちに学んでほしいこと

地域生涯学習プロジェクトに参加する学生のほとんどが、社会教育主事（※２末尾に語句説明）の資格取得を目指しています。そういった意味では、将来的に社会教育の現場とか市町村、教育委員会などで働きたいという希望をもった学生が多いです。

そのような希望をもった学生に、プロジェクトを通して、市町村の社会教育、生涯学習における住民との接点のおもしろさと厳しさを十分に学んでもらいたい。どれだけ、やりがいのある仕事かということを学生たちが自分自身で気づいてもらいたい。

プロジェクトでは、実践として行政や施設の方々と学生が共同で生涯学習講座を運営していくので、そのなかから社会性をしっかりと身につけてもらいたい。また、地域の方々が生涯学習を通してひたむきに学んでいる姿から、学生の本分としての学ぶことの大切さも再認識してもらいたい。

地域への貢献について

取り組み内容の項でも述べましたが、知多半島は本当に文化豊かなところです。「半田学」、「常滑学」などの地域学を発展させ、地域住民として誇りがもてる地域づくりに大学として貢献していきたいと考えています。

公民館と大学がタイアップして、それぞれの地域のオリジナリティーを活かしながら、その地域の教育資源を発掘したり、有効活用したりする取り組みの起点に現代GPがなれればと思っています。

大学そのものがもっている教育資源を社会、地域に還元していく場として、本学の生涯学習センターの役割は今後、ますます重要になっていきます。大学と地域を結ぶという観点で、機能的にもその中心的役割を担うのが生涯学習センターです。全国で100を超える大学が設置していますが、本学の場合、これまでの地域活動を通して地域との下地ができているだけに、“連携”を超えた“融合”が求められています。

これまで連携と言われていたものから、最近は、学社融合という言葉が出てきています。学社融合とは、学校教育と社会教育の融合のことで、双方が知恵を出し合い企画し、双方が元気になっていく意味合いがあり、生涯学習という視点で、本学と地域が共に元気になっていくプロジェクトを今後も続けていく所存です。

※１若衆宿とは、ある一定年齢に達した若者が、家を出て、村の村長や世話役の家に泊まりこみ、共同生活の中でコミュニティーを形成していくものです。こうした若衆宿は、現代にいたる過程で、どんどん失われています。

※２社会教育主事は、都道府県及び市町村の教育委員会の事務局に置かれる専門的職員で社会教育を行う者に対する専門的技術的な助言・指導に当たる役割を担います。職務の例として、教育委員会事務局が主催する社会教育事業の企画・立案・実施、管内の社会教育施設が主催する事業に対する指導・助言、社会教育関係団体の活動に対する助言・指導、管内の社会教育行政職員等に対する研修事業の企画・実施など、その業務は多岐にわたっています。

インタビュアー：現代 GP コーディネーター　名倉　弘二

インタビュー３

産業観光プロジェクト

社会福祉学部　磯部　　作　教授

プロフィール

1949年生まれ。人文地理学、社会科教育論、特に地域漁業と海域利用やツーリズム、沿岸域の開発・環境問題と地域づくり、地理教育におけるそれらの扱い方を専門分野とする。共著として「地理教育をつくる50のポイント」、「環境問題の現場から」、「転換期の地域づくり」など。

どのような取り組みをされるのですか

「体験型」をキーワードとした産業観光という視点から、現在幅広い調査を行っています。その調査は多岐にわたり、養護学校に向けての「養護学校の知多半島フィールドワーク調査」、「旅行会社における知多半島観光の実態調査」、知多半島の企業に向けての企業の産業観光調査、知多半島の自治体に向けての産業観光調査、地域住民の観光調査、中学校のフィールドワーク、障害者等の施設に向けての調査を順次行っています。今回のプロジェクトは３ヵ年計画で進めており、今年度と来年度の初めあたりまでは調査がベースとなっています。

本学美浜キャンパスのある美浜町で、「美浜学」という地域学を立ち上げ、そこに体験型の観光も取り入れて実践してきています。またゼミなどでも体験型の観光を調査してきました。今回の学生の地域参加による現代GPプログラムにおいては、上記の７つの調査を通して、知多半島という地域の良さや課題を学生と一緒になって見出し、農漁業などの地域の産業などを活かした体験型の観光をどのようにして展開していくのかを考えていこうとしています。社会福祉学部に所属する教員で、教職や生涯学習を担当する立場から、養護学校などの子供たちが、地域でどのように体験し、学んでいくのかというところに重点をあてていきたいと考えています。また、海に囲まれた知多半島で海をどう活かすかという視点を重視しています。

学生たちに学んでほしいこと

一番の思いは、学生たちに、今回のプロジェクトを通して、地域をしっかり自分の目でみつめてもらいたいということです。調査等を通して地域の課題を明確にし、どのようにしたら地域が住みやすくなるのか、地域で学びやすくなるのか、地域で仕事がしやすくなるのか、などを考えてもらいたいと思います。ハウツーの面で言えば、技術的な調査の手法を実践的に身につけてもらいたいですね。そして、学生が主体的に取り組み、学んでいってほしいと思っています。

上記で示したアンケート調査をするにあたっては、その調査内容はもちろんのこと、発送先をどのような企業にしたら良いかという段階から学生が自ら行っています。学生が知多半島の商工会などに説明に行って、相談しながら発送先企業の絞込みを行いました。また、知多半島の自治体への聞き取り調査など自主的に似行っています。

学生たちにとって、なかなか学外の人と話す機会は少なく、今回、地域の商工会や自治体等の方々と学生が折衝していくなかで、より積極的になり、成長していく姿が数多く見られています。

大学生の時は、社会に目を向け、人間的に非常に成長する時期です。現代GPのプロジェクトを有効に活用して、成長し、暮らしやすい地域社会をつくる主体なっていってもらいたいと考えています。

地域への貢献について

今回のプロジェクトを通して、知多半島という地域の良さや課題を、地域の皆さんとともに学びあっていきたいと思います。とりわけ、子ども達に伝えていくべきものは何かということを、学生と一緒に見つけ出していくことを考えています。
日常的に地域づくりを担っている中心は地域に居住する住民の方々であり、地域づくりの主人公は居住する住民の方々です。大学も地域に立地する以上その一員として、住民の方々とともに、地域の良さや課題を調査研究することが、大学として地域に貢献させていただく一つと考えています。また、調査するにあたってご協力頂いている学校や自治体、商工会、企業、施設などと、プロジェクトの調査研究成果を共有していくことで、住民と自治体などが協力して行う地域づくりに、大学として積極的に寄与していくことができればと思います。なお、体験などによる教育という観点から、経済的効果につきましては少し長いスパンで考えていきたいと思っています。

このプロジェクトでは、より良い地域をめざして、知多半島の地域づくりについて、引き続き総合的な視点から調査研究を進め、体験型の観光などについて具体的な提言などをすることができればと考えています。よろしくお願い致します。

インタビュアー：現代 GP コーディネーター　名倉　弘二